

3 不登校の児童生徒への対応・連携について

アドバイザー：青森第二養護学校 山口 江美子氏

【うまくいった事例の紹介】

- ・市外の中学校から特別支援学校へ入学。(欠席は170~180日程度)母親は病気がちで、介護する必要がある、ヤングケアラーであったため、保健師、児童相談所、相談支援事業所、医療などと繋がりケース会を実施した。各関係機関で生徒が登校できるように保護者への支援も含めて考え対応することができた。結果、登校できるようになり、卒業後の現在は、グループホームに入所して頑張っている。

不登校の児童生徒への対応と連携

【こんなことで悩んでいます】

- ・不登校で通常学級から特別支援学級へ在籍変更したケースもある。不登校傾向の児童は増えている。早期に対応した児童は成功ケースが多いが・・・。
- ・校内に不登校生徒が8名と多い。校外から通級で来ている生徒は9名。通級だったら来ることができるようだが、8時間しか時間が取れず、どうやったら通常学級へ戻せるのか悩んでいる。
- ・昨年度、卒業した生徒。現場実習を校内実習に変えて対応したり、オンラインで保護者対応したりしたが、保護者も心が落ち込んでしまった。つながりにもう少しアクションをかけていれば良かったのか・・・。

【○こんな対応をしています&◎こんな対応はどうでしょうか】

- 不登校対策室みたいなもので、校内支援委員会を設置して学校全体で取り組んでいる。
- 家族の手伝いで学校に来ることができない子もいる。児童相談所に連絡して少しでも対応してもらえるようにしている。
- スクールカウンセラーもいて、話を聞いてもらっている。
- 外からのアプローチとして、教育相談やフリースクールなども活用している。
- ◎家庭と連絡を取り、面談をする必要があるのでは？
- ◎保護者のサポートも必要なケースがあるのでは？困り感を共有し保護者との信頼関係を築くことも大事。

☆「不登校」は主障害ではない。町田先生の講話であったように、氷山モデルで考えると、水面上が「不登校」、水面下が「家庭」、「経済」、「発達」等の原因となるものがある。水面下にあるものが解決しなければ、「不登校」は解決しない。そのためにも、様々な専門を頼ることも一つの方法である。「一人」ではなく「組織的に」対応していくことが大切。それこそが連携協議会の意義でもある。

☆他校の取り組みの紹介

「サポセン通信」より、青森県立北斗高校では、サタデースクールで生徒がメンバーになって、市内の希望する中学生と高校生が語る場を設定している。そこで、「不登校は理由が一つではない」とし、『不登校を経験している人だからこそ分かる』と不登校を取り上げた語る場の紹介があった。

☆事例紹介

「家でしたいことがある。」＝「学校に行きたくない」と捉えるのではなく、「生きがい」があると捉えた。対象児は、犬が好きで飼っており、将来は「ペットショップで働きたい」という思いをもっていた。そのため、「ペットショップの店員になるために何ができればいいか一緒に調べてみない？」と働きかけると、「計算」や「漢字」などの学習も必要だと自分から気付いた。当時通っていた中学校へは登校できなかったが、進学先の高等部へは目的意識をもって通えるようになった。

山口先生より

